
紅の大地

ちょんちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の大地

【Zコード】

Z5776C

【作者名】

ちゃんちょー

【あらすじ】

国のために立ち上がった筈の少女は世界を取り巻く「や」に巻き込まれていく……／なかなか更新出来ず申し訳ありません。とある事情で更新が遅れます。もし宜しければお付合下さい。

プロローグ

血に染まつた大地をさらに沈みかけた太陽が、辺りを照らす。大地も空も紅く染まり、そこは紅の海のように見える。

紅の海の中に1人の少女が佇んでいた。

ほんの数秒前まで、腰まである長い髪を上方でしっかりと束ねてあつた。

今、ほどかれたその金の髪は風になびいている。光を浴び、金の髪は輝いている。

少女から少し離れたところでは、男たちが騒ぎ、その喜びを分かち合っている。

その男の群れの中から少女の方へ駆け足で近付いて行く者がいた。他の男たちに比べれば小柄な方だが、現在周りにいる男たちが大抵大柄でがつしりしているので実際小柄という訳ではない。少し肩を越す黒い髪を、後ろで一つにしてある。

「姫さまあ～！！」

叫びながら駆けてゆく。

それに反応した金髪の少女は声の主の方へと振り返った。

「姫様、お怪我はありませんか？」

「え？ 私？ 大丈夫よ！ それより……」

男はまだ若く、辛うじて20代である。少女はそれよりもさらによく、未だ18歳という年齢である。

「怪我人と死者はどのくらい出たの？」

「具体的な数字はどちらも出ていません。只今調査中です。ですが、今はつきり言えることは……」

「いつもよりその数が多いってことよね？」

自分が言つ筈だつた言葉を取られた男は、肯定の意を示す沈黙に入つた。

そつか、と残念そうに少女はしおげてしまった。

その後も話は続かず、重苦しい空気が流れた。

「あ、でも姫様！ 今回は敵の数も多かつた訳ですし、仕方がないかと……」

「そんな簡単に片付けないでよ！」

重苦しい空気を打破しようとかけた言葉は逆効果になってしまった。姫様と呼ばれた少女だけでなく、男もしおげてしまった。

「指揮してるのは、私なのよ！ 全て責任は私にあるわ！」

「ひ、姫様…………」

「今、こんなことを言い争つていっても仕方ない。コア、あなたは1人でも多くの怪我人を治療してあげて！ いえ、それは無理ね。……治療の手伝いをしてあげて！」

少女の瞳は何か決心でもしたかのように力強い。

コアと呼ばれた男もそれに応えるように強く頷く。

コアは一度少女を見据えると、男の群れへと駆けていった。

「さて、私も報告しなきゃ。今日中には帰れそうにないからね。」

少女の輝く金の髪は、辺りに光を散らした。

少女の傍らにはいつの間にか、鳥のような生物がいた。

まるで、これからやって来る自分の仕事をよく理解しているかのようだ。

長く美しい碧瑠璃の飾り羽を持つ鳥は首を傾げる仕種をする。

鶯色の瞳で少女を見つめる。

少女は鳥に目線を出来る限り、合わせるかのようにしゃがんだ。

何やら書かれた紙を鳥に見せるようにする。

「これを持つて帰つて。出来るだけ急いでね。」

鳥がしつかりと紙を銜えた。

少女は鳥の頭を2・3度ゆっくり撫でる。

鳥は暗くなろうとする空へと飛び立つた。

少女は男の集団の方へと歩き出した。

それに気付いた男たちは皆、少女の方に向き直る。

「みんな！ お疲れ様。今日はもう暗くなるから、明日ルブルム…
…私達の国へ帰りましょう」

男たちの中で最も大柄な男が集団の中から出でくる。

「姫！ それならば、勝利の祝賀会でも開きませんか？」

その意見に同意した男たちはやたらと騒ぎ始める。

「姫様！ 僕も賛成です！」

「是非ともやりましょうよー！」

男たちは口々に言つ。

大地を照らすものがなくなり、ただ暗闇が存在した。
暗闇を照らす大きな炎。辺りは炎のお陰で明るい。

明かりの周りで沢山の男たちが飲み食いしている。
またある者は歌い、ある者は踊る。

その騒がしい風景は夜であることを忘れさせる。

やがて、炎は小さくなつた。

しかしもう既に炎が無くとも十分視界がきく。

いつの間にか眠つてしまつた者は少なくない。そのまま騒ぎ続けた者も多々いる。

「ほら。ちょっとみんな？ もう帰るわよ！ 大事な家族や恋人や友人が待ってるんでしょ？」

半ば呆れた様子で少女は叫んだ。
どうやら多くの者が一日酔いにうなされている様だ。少女への返答は活力の無いものばかりだ。

「はい！ さっさと歩く！」

男たちに少女の喝が入る。

*

「お帰りなさいませ、姫様。お疲れ様です」

少女は沢山の家臣からかけられるこの言葉を軽く頷いて返した。

少女はこの国“ルブルム”の姫であり、次期王もある。しかし、現在この国に王はない。

数日ほど前に亡くなられたのだ。

正式に王となる為には世界の中心【レープハフト】に申告しなければならない。

レープハフトはルブルムの東の方にあり、一番技術が進んでいる国である。
世界の全ての情報が集まり、大小様々な国情勢を知ることも可能だ。

こんな事が出来るのはレープハフトぐらいである。

「姫様……、レープハフトに……」

「分かつてゐる。お父様……」

少女は碧い目に憂いを浮かべた。

「コアが後ろからためらわずに進み出た。

「姫様、感傷に浸つていて暇はありませんよ」

「何の容赦も無く厳しく言い放つ。

「分かっていると思いますが、王がいないと知れたらこの国はお終いです。他国は攻めてくるでしょうし、魔物たちも狙つてくるでしょう」

「うん。十分に理解しているつもりよ」

「でしたら一刻も早く……」

少女はコアがその続きを言つことを許さなかつた。

「ええ。これからレープハフトへ向かう準備をする。但し私一人で行かせてもらうから

少女の口から発せられた言葉に、少女以外の者は皆ただ啞然としている。

ようやくその場にいた家臣の1人が喋りだした。

「何言つてゐんですか！ そんなことして、もし姫に何かあつたらどうするおつもりですか？」

「私の不在時にルブルムが何があるかもしれないでしょ？ 戦力は出来るだけ残しておきたいの。これは私からの命令！」

「…………

一同、一言も反論できず俯いた。

少女は身を翻し扉の奥へと消えていった。

プロローグ（後書き）

こんばんはー
作者です。

この作品を読んでくださった皆様、鳥つて暗いと飛べないのでは？

という疑問は無しですよー！（強引だな）

ファンタジーだからなんでもありなのですー。（オイ、コトハー。）

はー。あの鳥はただの鳥ではない……とこいつとで許して下を。 （汗）

まだ本当に最初の最初ですが、感想待ってます！

より良い作品にするために悪い所をどんどん指摘しちゃって下を。 ！是非！

宜しくお願いします 三（— —）三

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5776c/>

紅の大地

2010年10月29日10時27分発行